

「ノデハナイカ」類の意味・機能

藤城 浩子

キーワード：イントネーション、終助詞、判断の再検討、バリエーション

1. はじめに

本稿では、日本語教育の立場から、「ノデハナイカ↓」、「ンジャナイ↑」、「ンジャネーノ↑」、「ンジャナイデスカ↑」、「ンジャナイデショウカ↓」など、「ノ／ン＋デハ／ジャ＋否定疑問」を含む表現について考察する。以下、これらの表現を特に区別せず総称するときは、「ノデハナイカ」類と記す。

「ンジャナイ↑」などの「ノデハナイカ」類は、日常会話で頻繁に用いられるが、日本語学習のための初級教科書で、「ノデハナイカ」類が学習文型として取り上げられている例は少ない。「ノデハナイカ」類が初級段階で充分に取り上げられてこなかった一因に、記述研究のスタートが遅かったことが挙げられる。田野村(1988)は、「何をする、危ないじゃないか」の「ジャナイカ↓」(原則的に「ノ／ン」を伴わない認識要請的な表現)と、「(空模様を見て)雨でも降るんじゃないか?」の「ンジャナイカ↑」(原則的に「ノ／ン」を伴う推測表現¹⁾)の区別を明らかにし、それぞれを「ではないか」の「第一類」、「第二類」と呼んだが、「ノデハナイカ」類の研究は、この頃からようやく本格的に始められたと言える。

また、これまでの研究では、「ノデハナイカ↓」を基本とし、「ンジャナイ↑」などは、その口語的なバリエーションとされるなど、ある一つの形を基本と捉える傾向があった。しかし、「ノデハナイカ↓」と「ンジャナイ↑」とでは、表しうるニュアンスが異なり、そこには書き言葉、話し言葉以上の違いがある²⁾。

そこで、本稿では「ノデハナイカ」類の基本義を探るとともに、形やイントネーションの違いによるニュアンスの異なりにも注目する。なお、本稿が対象とするのは、田野村(1988)の分類の「第二類」に当たる推測表現であり、認識要請的な表現(「第一類」)は扱わない。

2. 先行研究と本稿の立場

¹ 田野村(1988)は「推定」という言葉を用いている。

² 「ノデハナイカ」類の書き言葉と話し言葉が必ずしも一対一で対応していないことは、小西(2007)も指摘している。

2.1 安達(1999)と本稿

安達(1999)は、「ノデハナイカ」類について、否定疑問文の有標性が生む命題肯定への傾きという点から論じている。この「傾き」とは次のようなものである。

- (1) リカ「カンチ、私に黙ってること {ない/＃アル} ?」

永尾「——！」

(坂元裕二『TV版シナリオ 東京ラブストーリー』小学館、安達 1999:48)
「黙ってることある？」と異なり、「黙ってることない？」は、表現者³の見通しが「ある」という方に傾いていることを示し出す。安達はこの「傾き」が「ノデハナイカ」類にも反映されており、そのため「ノデハナイカ」類が肯定への傾きを持った推測表現として働くことを指摘している。また、安達(1999:117-118)は「ノデハナイカ」類の基本的な意味を「判断を下すための根拠の欠如」とする。

本稿は、安達の「ノデハナイカ」類が否定疑問特有の肯定への傾きを表し、推測表現となるという捉え方を支持する。しかし、「ノデハナイカ」類の基本的な意味を「判断を下すための根拠の欠如」とする点には賛成できない。

確かに、安達が指摘するように、「ノデハナイカ」類は、根拠なく「まったくの当てずっぽうで話し手が自分の考えを相手に伝えたいという場合に」(安達 1999:118)有効である。しかし、「根拠がなくてもよい」ということは「根拠がないことを表す」ということではない。例えば、(2)では、「てことは」という表現によって、根拠となる判断材料の存在が示されている。また、(3)は酒を飲んで味を確かめた上での発言で、これらが「根拠の欠如」を積極的に表しているとは考えにくい。

- (2) (ドラえもんの面白さについて述べた後で) なんでも、まだ 1000 話ぐらいは未収録だそうな。もしかしたらもっとあるかもしれないという。てことは、てんコミ 4 5 巻に収録された作品だけでは何もわからないんじゃないか⁴。

(<http://www.fukkan.com/>)

- (3) 満寿泉は、おいしかったです。家族の皆が、これは おいしいんじゃない。と言ってました。とても、香りが強いですね。

(<http://www.sakemado.com/koe/index.html>)

本稿では、後述する仮説①で示すように、「ノデハナイカ」類は「暫定的に示した自らの判断を再検討の対象とする」ことを表わすと考え。そして、自らの判断を再検討の対象として位置づけるという特徴が、「根拠の欠如」というニュアンスを生み出すことはあるものの、それが基本的な意味だとは捉えない。

³ 本稿では、「話し手」、「書き手」について、これらを特に区別せずに言及する際に、「表現者」という言葉を用いる。

⁴ (2)以下の用例における下線、「#」、「{ }」などの記号は、全て引用者(本稿筆者)による。また、形式によるニュアンスや振る舞いの違いを比較する場合には{ }を用い、オリジナルの形を{ }の初めに挙げる。

2.2 宮崎(2005)と本稿

宮崎(2005:29)は、「「ノデハナイカ」の用例には、心中で生じている思考内容の表現に用いられた例がかなり多い」ことに注目し、次のような例を挙げている。

- (4) 私はふと、ひょっとしたら令子とあの取り立て屋とは、何か打ち合わせでもしてあったのではないかという疑念に駆られたくらいです。

(宮本輝「錦繡」、宮崎 2005:29)

宮崎は、「このように聞き手の存在を前提としない用法にこそ、「ノデハナイカ」の認識的な意味の本質が反映する」(宮崎 2005:29)とする。そして、ここから、「ノデハナイカ」類を、「本質的には、話し手が発話時に行っている判断形成の過程を表示する形式」(宮崎 2005:29)だと捉えている。

確かに、「ノデハナイカ」類には、聞き手の即時の反応を前提としない例も多い。しかし、それは、(4)のように、「ノデハナイカ↓」という形をとる場合であり、「ンジャナイ↑」などは、逆に、聞き手の存在を意識した場面で現れるのが基本である。このことを考慮に入れた上で、宮崎の捉え方を見てみると、宮崎の想定は、予め「ノデハナイカ↓」がより基本的で、「ンジャナイ↑」はそのバリエーションだと考えた上で導き出されたものではないかと思われる。

これに対し、本稿では、「ノデハナイカ↓」には「ノデハナイカ↓」の、「ンジャナイ↑」には「ンジャナイ↑」の表すニュアンスがあり、どちらが基本というものではないと考える。

また、「判断形成の過程」という表現は、非常に幅広い理解が可能で、推測的な表現はどれも「判断形成の過程」を表していると言えなくもない。実際、森山(1992:73)は、「談話現場における判断形成過程を表示する」という性質を、「ダロウ」の意味・機能として記述している。

もっとも、宮崎(2005)は、「判断形成の過程」という特徴を、「ダロウカ」、「ノデハナイカ」、「ダロウ」という3形式の関係性の中から抽出していると考えられ、その点では、宮崎の立場は明確である。宮崎は、「ダロウカ」が真となる命題の「選択候補」(宮崎 2005:70)を提示するのに対し、「ノデハナイカ」は「有力候補」を提示し、「ダロウカ」より「一歩進んだ判断形成の段階を表示している」(宮崎 2005:70)と述べている。また、「ダロウカ」や「ノデハナイカ」が「判断未成立」の段階を表すのに対して、「ダロウ」はむしろ一定の結論として判断を下す段階を表すと考えるべき」(宮崎 2005:117)としている。

本稿でも、「ダロウカ」→「ノデハナイカ」→「ダロウ」という判断形成の段階が存在するという観察自体は妥当なものとする。しかし、これら3形式の関係の中で与えられた位置づけが、そのまま、3形式以外の表現をも含めた体系の中で妥当性を持ち、「ノデハナイカ」類独自の意味の本質として想定できるか、とい

う点に関しては、疑問を感じる。

例えば、(5)の「いいんじゃない？」という発話は、その後の「わかんないけど。なんで？」という発話とともに、「BはAの質問意図が汲み取れず、真剣に考えようとしていない」という印象を与える。Bの頭に浮かんだとりあえずの判断を、相手に投げ出すのみであり、むしろ判断形成を放棄して、相手に委ねているようにも感じられる。ここでの「いいんじゃない？」は、この他の、例えば「いいかも」、「いいような気がする」、「いいのかなー」に比べて、特に積極的に「判断形成の過程」を表しているとは考えにくい。

(5) (テレビドラマの登場人物の配役について)

A：チャングムは適任？

B：チャングム？ いいんじゃない？／かも。／ような気がする。／のかなー。} わかんないけど。なんで？ (実際の会話)

本稿では、3節の(6)に示すように、「ノデハナイカ」類の特徴は「暫定的に示した自らの判断を再検討の対象とする」という点にあると考える。そして、この「判断を下しつつも、それを再検討の対象とする」という特徴が、結果的に、「判断形成の過程」という段階を示し出すのではないかと考える。

3. 「ノデハナイカ」類の本稿での捉え方

3.1 「ノデハナイカ」類の意味・機能

本稿では、「ノデハナイカ」類が、その中に、表現者自身の事実認識を取り立てて明示的に表す「ノダ」と、否定疑問の形を含みこむことに注目し、「ノデハナイカ」類の意味・機能を次のように仮説する⁵。

(6) 仮説①：「ノデハナイカ」類の意味・機能

「ノデハナイカ」類は、ある事態の成否が表現者にとって不明である場合に、「前接する部分によって表される事態が事実だと判断する」という暫定的な事実判断を、表現者自身の判断として示しつつも、その判断の正当性を再検討の対象とすることを表す。

「ノダ」は、前接する事態を現象描写的に描き出すのではなく、「表現者自身の事実判断・事実認識・事実把握はこうだ」という形で、それが表現者の判断・認識・把握であることを、ことさら明示的に表すという特徴を持つ⁶。本稿では、この「ノダ」の性質を、「ノデハナイカ」類も引き継いでいると考える。また、「ノ

⁵ 本稿でも、「ノダ+デハ+ナイ+カ」といった部分の総和がそのまま「ノデハナイカ」類の意味となるとは考えないが、「ノダ」や否定疑問を含みこんでいることが、「ノデハナイカ」類の意味に影響を与えることは否定できないと考える。

⁶ 「ノダ」のこの性質については、藤城(2006)の立場を踏襲する。

デハナイカ」類は、否定疑問の形をとることで、判断を断定的に示すのではなく、暫定的な判断（の傾き）として示し出す。同時に、疑問の形をとることにより、その暫定的な判断を再検討の対象として位置づける。仮説①は、このような捉え方を反映したものである。

なお、「判断を再検討の対象とする」という捉え方は、宮崎(2005)の「判断形成の過程」に通じる面がある。しかし、本稿では、「ノデハナイカ」類は、「判断形成の過程」にあることそのものを表すのではなく、表現者自身の判断を明示しつつも、それを再検討の対象とすることを表し、その結果、その判断が未成立なものであり、「判断形成の過程」の段階にあることを示し出すと考える。

3. 2 「再検討」を委ねる相手

「ノデハナイカ」類は、さまざまな実現形を持ち、それらがそれぞれ特有のニュアンスや使用環境を持つ。例えば、「ノデハ」を「ンジャ」と発音する音便形は、当然テキストタイプ（話し言葉か書き言葉か、フォーマルな場かどうかなど）と深く関わっており、話し言葉的なテキストに多い。また、「ンジャネーノ」などはやや乱暴な感じを与え、表現者の個性や特定の待遇的態度を示し出す。

このように、「ノデハナイカ」類のバリエーションには、様々なニュアンスや機能の違いがあるが、ここでは判断の正当性の再検討を、最終的に、聞き手に投げかけるのか、表現者自身が引き受けるのかという違いに注目する。

(7) M03 「人名 5」と「人名 3」は仲いいの？。

M04 まー、いんじゃない。(宇佐美 2005)

(8) UF12 だから、たぶん冬、インフルエンザ系なんじゃないですか。

(宇佐美 2005)

(9) F05 え、どっかいっちゃったの？、どさくさに<紛れて><。>。

F06 <だか、多分><{}>、捨てちゃったんじゃないかしら。(宇佐美 2005)

(10) (提出しなければならないレポートの数について)

IF10 全部入れると、多分、4つぐらいあるんじゃないかな。(宇佐美 2005)

(7)、(8)では、判断の正当性の検討を、最終的に聞き手に投げかけるようなニュアンスが表れ、(9)、(10)では、表現者が自分の中で再検討しているというニュアンスが表れている。このような違いには、各実現形が伴う助動詞や終助詞、待遇性、イントネーション、テキストタイプなど様々な要素が関わっている。

ここでは、少々議論が細くなるが、「ノデハナイカ」類が伴う助動詞や終助詞、待遇性、イントネーション、テキストのタイプなどが互いに関わりあう様子を観察するとともに、それらと「判断の正当性の再検討を誰に委ねるか」という要素との関係を観察する。なお、「上昇イントネーション」の表す意味については、森山(1989)の「聞き手反応伺い」という捉え方を参考にする。

まず、書き言葉的な表現の場合、そもそも聞き手の即時の反応を期待してはいないため、「聞き手反応伺い」を表す上昇イントネーションは現れにくい。例えば、書き言葉で用いられ、終助詞「カ」を伴う「ノデハナイカ」は、通常下降イントネーションで読まれる⁷。この場合、聞き手への積極的な反応伺いはなく、疑問は表現者自身の中に留められる。そして、(11)のように「判断の正当性の再検討」を表現者自身が自分の中で行っているというニュアンスが色濃く表れる。

(11) 協議会が主導力を発揮すれば、地域の特性に応じて、医療機関への医師の派遣が弾力的にできるようになるのではないか。

(朝日新聞 2006 年 10 月 31 日朝刊)

ただし、聞き手への待遇を意識した丁寧体がいられると、そのことで聞き手への意識が明らかになる。このためか、「ノデハナイデスカ」や「ノデハアリマセンカ」は、書き言葉であっても、上昇イントネーションで読まれる⁸。この場合、上昇イントネーションによる「聞き手反応伺い」が、疑問を聞き手に投げかける姿勢を示し出し、正当性の検討を最終的に聞き手に委ねるニュアンスが強くなる。

(12) (高校で、卒業に必要な単位として定められた必修科目の履修が正しく行われていなかった例が次々と明るみに出た事件を受けて)

私立高で地歴科を担当しています。この機会に地理歴史の必修科目を再検討してもよいではありませんか。現在は世界史と、地理か日本史のどちらかの2科目が必修です。これを3科目の中から2科目を選択するという形に直すのです。

(朝日新聞 2006 年 10 月 30 日朝刊)

一方、話し言葉的な表現を見ると、推測表現としての「ンジャナイ」や「ンジャナイ(デス)カ」は、必ず上昇イントネーションを伴う。これは、下降イントネーションの「ンジャナイ↓」、「ンジャナイカ↓」が、「なんだ。わかってるんじゃない(か)」のような認識要請的な表現(田野村の分類の「第一類」)や、「買ったんじゃない。もらったんだ」のような、いわゆるスコープの「ノダ」の否定形と解釈されてしまうことと関係しているだろう。

しかし、話し言葉でも、(10)のように、「ナ」を伴う「ンジャナイカナ」⁹などは、下降イントネーションとなる¹⁰。これは、「ナ」がもともと「独話助辞¹¹」(宮

⁷ イントネーションの判断に関しては、筆者の内省をもとに、日本語母語話者3名に確認をとった。

⁸ 「ノデハナイデスカ」や「ノデハアリマセンカ」は、下降イントネーションになると、通常、認識要請と解釈される。「ノデハナイデスカ」が上昇イントネーションで読まれることには、このような事情も関係していると考えられる。

⁹ 「ノデハナイカ」類が「ナ」、「ネ」を伴う場合は、必ず「カ」を介する。

¹⁰ 「ナ」の部分が上昇イントネーションとなることはあるが、その場合でも、「カ」の部分は下降イントネーションとなる。

¹¹ 本稿では、「ナ」、「ネ」、「ヨ」などを「終助詞」と呼んでいるが、宮崎(2005)

崎 2005:147)であることと関係していると言えよう。宮崎(2005:147)は「ナ」が「認識の現場性」を表すとしているが、この立場を踏襲すると、「ナ」が「カ」に後接する場合、「カ」によって示された疑問について、表現者自身が発話時にも考えを巡らしていること(「認識の現場性」)を表わすと考えられる。このため、表現者が疑問を自分で引受け、検討しているというニュアンスが強くなる。

「ダロウ」、「デショウ」の付加も、下降イントネーションを招きやすい。三宅(1995:85)は、「ダロウ」、「デショウ」は、「話し手の想像の中で命題を真であると認識する」ことを表すとしている。とすると、これらが疑問化した「ダロウカ」、「デショウカ」は、疑問を聞き手に投げ出すのではなく、「話し手の想像の中で思い巡らすというニュアンスを持つと考えられる。

(13) (事件現場の様子を電話で伝える刑事の発話)

犀川の声 「ただ、腹部を怪我しています。本人は否定していますが、
刺されたんじゃないでしょうか」 (伴一彦「サイコドクター」)

ただし、聞き手の待遇を意識した丁寧体「デショウカ」が用いられた場合には、そこに聞き手への意識が生じる。そのためか、「ノデハナイデショウカ」や「ンジャナイデショウカ」は、上昇イントネーションにもなりうる。この場合、表現者自身の想像の中で正当性を検討しつつも、聞き手にもそれを問いかけるというニュアンスになると考えられる。

ここまでの考察を簡単にまとめてみる。まず、聞き手の即時の反応を意識した話し言葉における「ノデハナイカ」類は、上昇イントネーションを伴いやすく、その場合、「判断の正当性の検討を、聞き手に委ねる」というニュアンスが色濃く表れる。しかし、「ダロウ」のような助動詞、「ナ」のような終助詞は、疑問を(少なくとも一旦は)表現者自身が引き受けることを示し出す。これが下降イントネーションを誘発し、「判断の正当性を表現者自身の中で再検討する」というニュアンスを引き出すと考えられる。また、そもそも聞き手の即時の反応を期待しない書き言葉では、そのような助動詞や終助詞を伴わずとも、下降イントネーションで読まれ、「判断の正当性を表現者自身の中で再検討する」というニュアンスを色濃く表すと考えられる。

以上の考察を、仮説②として、(14)に記す。

(14) 仮説②:「再検討」を委ねる相手

「ノデハナイカ」類は、表現者の暫定的な事実判断を示した上で、その判断の正当性を再検討の対象とすることを表すが、その際、その再検討を、聞き手に委ねるのか、表現者自身の中で引き受けるのかでニュアンスに違いが

は「終助辞」という用語を用いている。ここでの「独話助辞」という表現は、宮崎(2005)の用語をそのまま引用したものである。

出てくる。どちらのニュアンスが強く表れるかは、「ノデハナイカ」類が現れるテキストのタイプ、および、「ノデハナイカ」類が伴う助動詞、終助詞、待遇性、イントネーションなどの要素が互に関連しあう中で、決定づけられる。

ただし、この「聞き手に委ねるか」、「表現者自身の中で再検討するか」という違いは、必ずしも対立的なものでなく、表現者自身が再検討しながら、聞き手に対しても疑問を投げかけるということもあり、連続的なものだと考えられる。

なお、ここで、どの部分が上昇／下降することを「上昇イントネーション」、「下降イントネーション」と呼ぶかを、明らかにしておく必要があるだろう。本稿では、終助詞「カ」を伴う場合は「カ」の部分が、伴わない場合は「ノデハナイカ」類表現の最後部が上昇／下降することをもって、上昇／下降イントネーションとする。従って、上昇イントネーションという場合、「ンジャナ[↑]ア」、「ンジャ[↑]ン」、「ンジャネー[↑]ア」、「ンジャナイデス[↑]カ」などを指し、下降イントネーションという場合、「ノデハナイ[↓]カ」、「ノデハナイダロ[↓]カ」、「ンジャナイデショ[↓]カ」、「ンジャナイデショ[↓]カ」、「ンジャナ[↓]カナ」などを指す。

4. 仮説の検討

4.1 仮説①の検討

4.1.1 語用論的な考察

「ノデハナイカ」類は、情報へのアクセスが、受け手に比べて表現者に圧倒的に有利で、かつ、表現者が、受け手が求める情報の提示に責任を担う立場にいる場合、不適切な表現となりやすい。

(15)成人講座の受講生：この講座は、連休の間は、ずっとお休みですか。

職員：ええと、{#お休みなんじゃないですか／#お休みなんじゃないで
しょうか}。ちょっと調べてみますね。 (作例)

(15)の職員の発話は、講座の運営者側にいる人物の発話としては、無責任な印象を与え、不適切である。同じく情報が不確かな場合でも、例えば、「あ、お休みかもしれません。ちょっと調べてみますね」、または、「ええ、お休みだと思います。ちょっと調べてみますね」などと言われれば、特に無責任な印象は受けない。これはなぜだろうか。ここでは仮説①による説明を試みる。

仮説①によると、「ノデハナイカ」類は、「自分はこう判断するが、その判断の正当性に関しては再検討の必要がある」という形で情報を提示する。これは、裏を返せば「自分はこう判断するが、それはあくまでも自分の暫定的な判断であっ

て、判断の正当性に保証はない」ということでもある。それが、責任を持って情報を提供する立場にある人間の発話としては、独りよがりなものに響き、無責任な印象を与えるのではないだろうか。

2節で見たように、安達(1999)は「ノデハナイカ」類に「根拠の欠如」という意味を付与しているが、このような指摘が見られるのも、「ノデハナイカ」類が「自分の判断は示すものの、その正当性に保証はない」という独りよがりな印象を与えうるためでははいだろうか。特に、「ンジャナイ↑」のように上昇イントネーションを伴い、聞き手に最終的な判断を委ねる場合、無責任で「当てずっぽう」な感じを与えやすい。

次に、安達(1999:122)の、「ノデハナイカ」類は命題受容の「タシカニ」と共起しにくいという指摘について考えてみたい。

(16) ??たしかにあなたの言うとおりにゃないですか。(安達 1999:122)

これと同様の現象だが、相手の発話を受けて「それまでそうは思っていなかったが、言われてみればそうだ」と言う場合にも、「ノデハナイカ」類は用いにくい。

(17) A: でも、昨日2人、編集経験があるってゆってるから、そんな悪い人じゃないし。

B: でもほかにも、ほかに行ってもおなじことゆってるんじゃないの、っていう気がとてもするんだけど。

A: うん、それはある{かもしれない／#んじゃないですか}。

(現代日本語研究会 1999)

仮説①を用いると、これらの現象は次のように説明できる。(16)や(17)のように、相手の発言を受容し、「言われてみればそうかもしれない」と考え直す場合、そこには、a) 当該の命題はもともと受け手の情報である、b) 表現者はそれを受け入れる、という特徴がある。

しかし、「ノデハナイカ」類は、もともと表現者自身の事実判断を取り立てて明示する「ノダ」を含みこんでおり、提示する暫定的判断が「表現者自身の判断」であることをことさら明示する。「ノデハナイカ」類のこの特徴は、上記のa)と相容れない。提示する暫定的判断が「表現者自身の判断」であることをことさら明示することによって、その情報がそもそも聞き手からもたらされたものであることを、半ば無視する形になってしまうためである。

また、「判断の正当性を再検討の対象とする」という特徴は、b)となじみにくい。判断の正当性を再検討の対象とするという行為は、「情報を受け入れる」という行為と相容れないためである。

更に、宮崎(2005)は、(18)のように聞き手の意識を確認する場面で、確認要求表現として「ノデハナイカ」類を使うと、相手の行動を詮索しているようで文脈に合わない指摘している。

- (18) (幹事による出欠の確認) 土曜日の宴会、君も出席する {だろう／＃ん
じゃないか／ね} ? (宮崎 2005:113)

本稿では、この現象について、次のように考える。(18)では、情報は明らかに聞き手の領域に属するもので、表現者はその情報を受け取る側にある。しかし、「ノデハナイカ」類を用いると、判断が、暫定的であれ、表現者自身の判断・把握であることをことさら明示することになる。(18)が不自然なのは、一方的に情報を有している相手に対して、ことさら自分の判断を明示しているためで、これが詮索的に響くのだと考えられる。

以上、ここでは、(15)～(18)の語用論的な現象について、仮説①による説明を試みたが、仮説①を用いることで、これらの現象に対して、統一的な説明ができたのではないかと思う。これは、この仮説の妥当性を裏付けていると考えられる。

4.1.2 終助詞との共起関係

「ノデハナイカ」類には、「ナ」とは相性がよいが、「ヨ」や、「ョ」と類似の機能を持つ「サ」、「ワ」、「ゾ」、「ゼ」とは共起しないという特徴がある¹²。

- (19) M11: 30、3、4 度ぐらいいは いってたんじゃないか {な／*よ／*さ／*わ
／*ぞ／*ぜ}。 (宇佐美 2005)

対比のために他の認識的モダリティ表現を見てみると、例えば「カモシレナイ」、「ハズダ」は、「ヨ」などの終助詞と共起する。

- (20) 「よろしく」とかいって、なんか配られるかもしれないよ。

(現代日本語研究会 2002)

- (21) 少なくともと思うよ、何人かいるはずだよ。 (現代日本語研究会 2002)

なぜ「ノデハナイカ」類は、「ヨ」、「ゾ」などの終助詞と共起しえないのだろうか。ここでは、「ヨ」を例にとって考えてみたい。

蓮沼(1996:384)は、「ヨ」は「文脈に認識上の何らかのギャップの存在を表示するとともに、そうした状況における認識能力の発動、あるいは認識形成に対する指令を表す」と述べている。一方、「ノデハナイカ」類は、判断の正当性を、再検討の対象として位置づける。表現者自身が、自らの判断・認識を疑い、それを再検討の対象として位置づけているにもかかわらず、聞き手には、「自分の認識とギャップがあるから、すり合わせを行うべく認識形成をせよ」と指令を出すのは、矛盾しており、不自然である。「ノデハナイカ」類が「ヨ」と共起しないのはこのためだと考えられる。

これに対し、「ナ」は「認識の現場性」(宮崎 2005:147)を表すとされ、「ノデハ

¹² 「自分でそう言ったんじゃないかよ」のような例は、「ノ」を伴ってはいるが、意味的には認識要請的な表現であり、田野村(1988)の分類では「第一類」に属する。従って、本稿が考察の対象とする「ノデハナイカ」類には含まれない。

ナイカ」類とよくなじむ。判断の正当性を発話の時点で再検討するということは、まさに「認識の現場性」を伴うためだ。

なお、「ネ」は「認識の現場性」という意味を「ナ」と共有しながら、「対話助辞」として、同意や確認を聞き手に求める働きを」(宮崎 2005:149)持つようになったものである。そのため、「ナ」と同様、「ノデハナイカ」類と共起しうる。ただし、そもそも「カ+ネ」という組み合わせの使用に個人差があるため、「ンジャナイ (デス) カネ」の使用にも個人差が見られる。特に丁寧体をとらない場合¹³、使用者層が年配の男性に偏る傾向があるようだ。例えば、(22)は 50 代の男性の発話である。

(22) (残念賞しかとれなかったのはなぜかという話の中で)

よく、理解しなかったんじゃないかね、審査員が。(現代日本語研究会 2002)

以上、「ノデハナイカ」類に「自らの判断を再検討の対象として示し出す」という意味・機能を認めることで、終助詞との共起関係に対する説明が容易になることを見た。これは仮説①の妥当性を裏付けるものと考えられる。

4.2 仮説②の検討

安達(1999:125-129)は、命題内容の成否について「分かる可能性があるのは話し手以外は考えられない」状況では、「ノデハナイカ」をそのまま使うことはできず、「カナ」や「デショウカ」などを付加する必要があると指摘している。

(23) M 僕、この映画で初めてニトログリセリンというものが世の中にあると知ったんです。あと、紙巻き煙草も。

W 紙巻き煙草は西部劇で見ていたから知ってたけど、ニトログリセリンは僕もこの映画で初めて知ったんじゃないかな。

(三谷幸喜・和田誠『それはまた別の話』文藝春秋、安達 1999:125)

(24) a. ?? ニトログリセリンは僕もこの映画で初めて知ったんじゃない?

b. ?? ニトログリセリンは僕もこの映画で初めて知ったんじゃないですか?

(安達 1999:126)

安達は、「一般的に通常の疑問文が聞き手に対して応答を要求する機能を持つ」ことから、(24)のような「ノデハナイカ」類の使用は不自然になると指摘している。(23)、(24)において、「僕」が、ニトログリセリンをどこで知ったかは、「僕」のみが知ることであり、それが分かる可能性があるのは話し手以外は考えられない。そのため、聞き手に対して応答を要求するのは不自然だというわけだ。

また、安達は、「カナ」や「デショウカ」の付加について、「カナ」や「デショ

¹³ 逆に、「デス」は、聞き手を意識した待遇表現であるため、もともと独話に用いられる「ナ」とは共起しにくく、「ンジャナイデスカナ」は今回観察したコーパスには出現しなかった。

ウカ」は、聞き手の存在を前提としない「疑いの文」(安達 1999:127)を形作るため、これらを付加することにより、「その考えがあくまで話し手の個人的な考えであるようにする」(安達 1999:128)ことができる。そのため、「聞き手への伝達であることを明示せず、まるで話し手が心中で考えているようにして伝えるという手段をとる」(安達 1999:129)ことになり、(23)は自然な発話となると述べている。そして、この他にも、「～んじゃないかと思う」のように、思考動詞の補文に入れ込むことによって、同様の効果が得られるとしている。

安達は、更に、(23)のような例で「カナ」や「デショウカ」の付加などの文末調整が必要になるということから考えると、「「のではないか」は話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味あいを強く持っているということが示唆されよう」(安達 1999:129)と述べている。

本稿も、(23)、(24)のような現象に関して、基本的には安達の考えを支持する。しかし、「ノデハナイカ」類が、本質的に「話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味あいを強く持っている」という主張には賛成できない。これは、「ノデハナイカ」類の基本的な捉え方にも関わってくることであるため、宮崎(2005)とも対比しながら、以下に考察していきたい。

2節で見たように、宮崎(2005)は、「聞き手の存在を前提としない用法にこそ、「ノデハナイカ」の認識的な意味の本質が反映する」(宮崎 2005:29)として、「ノデハナイカ」類を、「本質的には、話し手が発話時に行っている判断形成の過程を表示する形式」(宮崎 2005:29)であると捉える。これは、「ノデハナイカ」類の様々な実現形のうち、「ノデハナイカ↓」という形を基本と考え、話し手自身の中での「判断形成過程」を「ノデハナイカ」類に共通する基本義と捉える立場である。

一方、安達(1999)は、むしろ「ンジャナイ↑」のような話し言葉的な表現を「ノデハナイカ」類の基本と考え、「ノデハナイカ」類を、「話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけるという意味あい」(安達 1999:129、傍点は引用者による)を持つ形式だと捉える。「ノデハナイカ」類の基本的な意味を「判断を下すための根拠の欠如」とし、「まったくの当てずっぽう」で考えを伝える場合に有効だとする捉え方も、この立場と関わっていると考えられる。「まったくの当てずっぽう」というニュアンスは、「ンジャナイ↑」のように、最終的な判断を聞き手に委ねる形をとる場合に特に表れやすいためだ。一方、「ノデハナイカ↓」は、例えば(25)のように、熟考の末に得た結論を示す場合にも、しばしば用いられる。

- (25) 学生それぞれの疑問を「国」に集約し、企画する私たちだけでなく、同世代にも興味を持てるテーマにできないだろうか。正面から向き合ったことがない「国」「日本」を世代を超えて考えてみたい。テーマは決まった。

だが、誰がこのテーマを多くの人に伝えられるのか。人選もまた難題だった。

政治家や学者、評論家に抽象的な「国」を語ってもらうのではなく、身近な視点から国を考えたかった。その中から浮かんできたのが、山田洋次監督だった。消えた国、満州で育ち、戦争をはさんだ監督の半生は日本の歩みと重なる。映画を通して日本の戦後社会とその時代を生きる人々を見つめてきた。20代と70代、世代を超えて国を考えるのにもふさわしいのではないか。意見が一致した。

(朝日新聞 2006 年 10 月 28 日朝刊)

本稿では、「ノデハナイカ↓」が基本だとすることにも、「ンジャナイ↑」が基本だとすることにも無理があるのではないかと考える。「ノデハナイカ↓」が基本だと考えると(5)のような例が、「ンジャナイ↑」が基本だと考えると(25)のような例が説明しにくくなるためだ。また、ある一つの実現形を基本と捉え、他の形をその書き言葉的／話し言葉的なバリエーションと捉えたと、(5)、(25)のような例における意味やニュアンスの違いが、テキストタイプによるスタイルの違いの中に吸収されてしまう恐れがある。そのことで、「ノデハナイカ」類の使用の実態が見えにくくなる可能性があると考ええる。

例えば、次の(26)では、「カナ」や「デショウカ」を伴わない、いわば裸の形の「ノデハナイカ」が用いられているが、この表現に不自然さはない。これは、(23)、(24)のような現象が、「カナ」や「デショウカ」などの付加という要因だけでは十分に説明できないことを示している。同時に、「ノデハナイカ」類がもともと「話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかけろ」という意味あいを強く持っているわけではないことも示している。安達(1999)がこれを「カナ」や「デショウカ」などの付加という点からのみ論じているのは、安達が、「ンジャナイ↑」を基本と考え、「ノデハナイカ」はその書き言葉的なバリエーションと捉えているためではないだろうか。

(26) (書かれた文章で) ニトログリセリンは僕もこの映画で初めて知ったのではないか。

ここでは、ある一つの実現形を基本とは捉えず、「ノデハナイカ」類に共通する基本義は、仮説①に示したように、「表現者自身の暫定的な事実判断を明示し、その判断の正当性を再検討の対象とする」ことだと考える。そして、(23)～(26)の現象は、(14)の仮説②によって説明可能だと考える。

まず、(24)a、b の「ンジャナイ↑」、「ンジャナイデスカ↑」は、聞き手の即時の反応が期待できる話し言葉に出現している。また、表現者自身の思考や認識を示唆する終助詞や助動詞は伴わず、上昇イントネーションをとる。このことから、この「ンジャナイ↑」は、「聞き手反応伺い」により、判断の正当性の再検討を、最終的に聞き手に委ねるニュアンスを示し出すと考えられる。しかし、安達も指摘しているように、「僕」のみが知る事態に関する判断の正当性の再検討を、聞き手に委ね

るのは不自然である。

一方、(23)は、「認識の現場性」を表す独話マーカ「ナ」を伴う。これによって、表現者が発話時に、前接する暫定的な判断に関して思いを巡らしていることが示され、下降イントネーションを伴う。このため、「聞き手反応伺い」が示されることもない。一方、(26)の場合、もともと聞き手の即時の反応を意識しない書き言葉であるため、上昇イントネーションとはならず、「聞き手反応伺い」というニュアンスも示されない。どちらのケースでも、判断の正当性の再検討を聞き手に委ねることが積極的に示されることはない。そのため、表現者のみが知る情報であっても、「ノデハナイカ」類を用いることができると考えられる。

また、同じ「ンデハナイデショウカ」でも、下降イントネーションを伴う場合と、上昇イントネーションを伴う場合とでは、疑問を積極的に聞き手に投げかけるかどうかという点で、ニュアンスが異なる。

- (27) ニトログリセリンは僕もこの映画で初めて知った {んじゃないでしょうか↓／
#んじゃないでしょうか↑}。

この場合の「ンジャナイデショウカ↑」は、「デショウ」という助動詞を伴っているが、上昇イントネーションをとっているため、表現者自身の想像の中で判断の正当性を再検討しつつ、聞き手にもそれを投げかけるというニュアンスを伴う。そのため、表現者しか知りえない情報について、聞き手に問いかけることになり、やはり不自然さを伴う。

以上、(23)～(27)の観察を通じて、「ノデハナイカ」類には、そのパリエーションによって、「判断の正当性の再検討を聞き手に委ねるか、表現者自身が自ら疑問を受け止めて検討するか」というニュアンスの違いがあり、この違いには、「カナ」や「デショウカ」の付加という要素以外に、テキストタイプ、待遇性、イントネーションといった様々な要素が関連していることを見た。これらの考察は、仮説②の妥当性を裏付けているものと考ええる。

なお、(23)、(24)に対する本稿の主張は、安達(1999)の見解とかけ離れたものではなく、これを補うものである。ただ、(23)、(24)の現象を「カナ」や「デショウカ」などの付加という点からのみ論じるということは、「ノデハナイカ」類に、基本的に「話し手の不確かな考えを聞き手に対して持ちかけ、訴えかける意味あい」があるとする立場を反映しており、この点で、本稿は安達と立場を異にする。

5. まとめと今後の課題

本稿では、(6)の仮説①で「表現者自身の暫定的な事実判断を明示しつつ、その判断の正当性を再検討の対象とすることを表す」という「ノデハナイカ」類の基本的な意味・機能を規定した。また、(14)の仮説②で、判断の正当性の再検討を

聞き手に委ねる場合と、表現者自身が自ら引き受ける場合とがあり、どちらの性質が強く現れるかは、「ノデハナイカ」類が現れるテキストのタイプや、「ノデハナイカ」類が伴う助動詞、終助詞、待遇性、イントネーションなど、様々な要素が互いに関連しあう中で決まってくることを主張した。そして、4節、5節で、これらの仮説の検証を試みた。

このように、本稿では、「ノデハナイカ」類の基本義を探るとともに、そのバリエーションを「再検討を誰に委ねるか」という点から観察したが、「ノデハナイカ」類のバリエーションについては、他にも未整理な部分が多く残されている。

例えば、「ンジャナイ↑」と言い切る形は頻繁に用いられるが、「ンジャナイカ↑」と「カ」で言い切って終わる形は多くなく、その場合には、終助詞として「ノ」を用いることが多い¹⁴。

(28) M16 もうギリギリなんじゃないの? (宇佐美 2005)

一方、丁寧体を含む「ンジャナイデスカ」や、書き言葉的な「ノデハナイカ」の場合、「カ」で言い切ることも多く、逆に、「ノ」の使用はまれである。

(29) UF11 お、あ、でも、たぶん割合的には多いんじゃないです {か/の}? (宇佐美 2005)

(30) 日本もヨーロッパを見習って、多くの人が自転車を利用できるようにした方がいいのではない {か/#の}。

(朝日新聞 2006 年 10 月 27 日 朝刊)

また、「ノデハ」での言いさしなど、通常、書き言葉にしか現れない形もある。

(31) 「この風景は、日本の原風景とも言えるのでは」と星野さん。

(朝日新聞 2006 年 10 月 31 日 朝刊)

この「ノデハ」での言いさしは、通常、話し言葉には現れないが、書き言葉に現れたものを観察すると、そのほとんどが、(31)のような話し言葉の引用である。

このように、「ノデハナイカ」類のバリエーションには、様々な特徴的な使用実態が見られるが、これらの特徴は未だ十分には記述されていない。今後、これらを丁寧に観察し、系統立てた記述をしていく必要があるだろう。

また、本稿では、イントネーションの判断を、基本的に、日本語母語話者である筆者の内省によって行った。しかし、内省による判断では恣意性を排除できない面がある。今後、基本周波数曲線を機械的に抽出し、その観測に基づいた考察も行っていきたい。

¹⁴ 宇佐美(2005)では、「ンジャナイカ」で終わる例は 1 件であるのに対し、「ンジャナイノ」で終わる例は 46 件見られた。ただし、これは、通常の質問文にも共通する現象である。「デス」、「マス」を伴わない、いわゆる普通体の質問文では、「カ」が「ぞんざい」(野田 1993:47)な感じを与え、そのため、終助詞として「ノ」を選ぶ場合が多いことについては、野田(1993)が指摘している。